

ひらく地平

石巻市発

いまだ荒地地が広がる。津波が押し寄せ、戻ると、自宅は流されて立っていった。2階建てかつての住宅地に昨年11月、白壁の土蔵がぼつりと建った。宮城県石巻市で、東日本大震災の津波被害が最も大きかった地区の一つ、門脇町。自宅そばで小さなテニスクラブを営む本間英一(ほんま・えいいち、64)が寄付を集めて修繕した。「震災を伝えるのに役に立てば」。壁にはがれきがつつかった無数の傷痕を残し、内部には津波直後の写真パネルなどを並べた。今春の一般公開を目指している。

市内を一望する日和山(ひよりやま)のふもと、の自宅は海岸から約80



土蔵を修復し、震災当時の写真などを展示する本間さん

耐えた土蔵 見て

0。津波が押し寄せ、戻ると、自宅は流されて立っていった。2階建て家族らと山に駆け上がり、いたが、明治時代からの1階天井まで浸水した難を逃れた。水が引いて土蔵だけが踏ん張るようが何とか耐えた。

当初は解体も考えた。付近で自宅を再建した贈してくれた。場所は土蔵のすぐ隣。「まねきの家が100分の1近くに縮みにも集まる。「春に土蔵を公開したら観光客も足を止めてくれるかも」と期待も膨らむ。

人を未来を招く力に

きた大学教授ら支援者の事業計画を立てるが、全「残しましょう」というのの工事が順調に進んで声に後押しされたからも、完了予定は19年春の見通しだ。「復興のシンボルにもなる」と前向きな気持ちもなった。全国から300万円以上の寄付が行政をあてにしてはかちにもなった。行政では、復興はいつにならるのかわからない。住民集まり、2012年春か、同じで助け合おうと12年冬、近隣住民と「まねき」を越えさせるため、陸工事を進め、完成した。

「街、100分の1に」 コミュニティー」という団体をつくり、代表に就いた。4つあった自治会が人が減って機能停止している。避難道の大掃除で船乗りとして、商船などは厳しい。隣の南浜町や忘年会など、親睦を深めると活動が中心だが「震災前より近所づきあいが増えた」との声も上がる。地域に待ち受ける未来は、きつとたやすくはない。でも、土蔵やまねきの家が、これからの航路を照らす力になると信じている。

正式な自治会ではないが、行政の補助金は受からず力になると信じている。

「まねき」という名前には、多くの人を呼びたいとの願いのほかにもう一つの大切な意味を込めている。江戸時代に千石船の出入りで栄えたこの地では、海流が複雑な難所を越えさせるため、陸から船に指示を出す役割を担った。本間自身も29歳まで船乗りとして、商船などで太平洋やインド洋を巡った経歴を持つ。

「まねき」という名前には、多くの人を呼びたいとの願いのほかにもう一つの大切な意味を込めている。江戸時代に千石船の出入りで栄えたこの地では、海流が複雑な難所を越えさせるため、陸から船に指示を出す役割を担った。本間自身も29歳まで船乗りとして、商船などで太平洋やインド洋を巡った経歴を持つ。

航路を照らす

文 植松正史
写真 沢井慎也